

目 次

序論 文章構成研究の起源としての「言語活動」

—言語研究の対象定位を巡る問題—

1. はじめに	7
(1) 「質的研究」の拡大と深化	7
(2) テキスト概念の普及と拡大	11
(3) 回帰する問題の圏域	14
2. 普遍的言語（ラング）と個別的言語（パロール）	
—ソーシャルの言語観の両義性—	16
(1) ソシユール再評価の焦点	16
(2) ソシユールによる言語学研究の対象定位の原像	20
3. 「ゲシュタルト（構造）」と「場」の思想	
—研究対象の指定における言語観の役割—	31
(1) 2種類の構造概念	33
(2) 構造を記述するという両義性	37
(3) 佐久間の「場」の概念における言語活動	41
(4) ビューラーの言語観による三つの方向と二項モデル	45
4. 研究対象の定位における「パラダイム」	53
5. 本研究の課題	65
凡例	69

第1章 テキスト研究の基礎と発展 I

—欧米でのテキスト研究の対象定位と方法をめぐって—

1. はじめに	71
2. 欧米のテキスト研究史概観	73
(1) 多様化し拡大する欧米のテキスト研究の領域とテーマ	74
(2) テキスト研究の起源	77
3. 欧米のテキストの言語思想の黎明と発展	87
(1) マリノフスキーのコンテキストの概念	87
(2) プラーク学派の思想—マテジウスとヤーコブソン	94
2-1 マテジウスの「文の実勢的構成」	95
2-2 ヤーコブソンのコミュニケーションの概念	101
(3) ハリデー&ハサンの体系機能文法	106
4. 「テキスト」概念の整理	112

第2章 テキスト研究の基礎と発展 II

—日本でのテキスト研究の対象定位と方法をめぐって—

1. はじめに	117
2. テキスト黎明期の研究—20世紀前半の日本の言語思想—	118
(1) 橋本進吉の業績とそれに続く日本語学の流れ	118
1-1 橋本進吉の業績	118
1-2 寺村秀夫の業績	124
1-3 橋本と寺村から学ぶべきこと	127
(2) 時枝誠記の業績	129
2-1 時枝の言語過程説の意義	129

2-2 時枝の質的統一体の意義	138
2-3 時枝の『文章研究序説』の意義	142
(3) 佐久間鼎と三尾砂の言語思想	148
3-1 佐久間鼎の文分類とその方法	148
3-2 三尾砂の文分類とその方法	151
3-3 佐久間の三つの場	156
3-4 20世紀前半の日本語研究の言語思想の意義	161
3. テキスト発展期の文章研究の流れ	163
(1) 永野賢の文章論	167
(2) 永尾章曹の表現論	172
4. テキスト拡大期の研究	177
5. おわりに	184

第3章 文章構成研究の基礎的視点 I

—小説の文章構成における言語形式の用法と役割—

1. はじめに	189
2. 「物語」の文章構成	192
(1) トマシェフスキーのテーマ論と フォースターのストーリーとプロット	192
(2) プロップの「昔話の構造」	197
(3) ジュネットの物語の時間論とロングエーカーの物語の帯	201
3. 物語の内部構成に関する日本の研究	206
(1) 主語と陳述の連鎖による文章の内部構成	206
(2) 描写と説明による文章の内部構成	209

(3) テンス・アスペクトの観点からの内部構成……………	215
4. 物語の構成の先行研究の成果……………	219
5. おわりに……………	222

第4章 文章構成研究の基礎的視点 II

—小説の内部構成分類における一試案—

1. はじめに……………	225
2. 小説の内部構成をたどる方法と手順……………	228
3. 小説の内部構成の各脈絡とその役割……………	239
(1) その時のその場を共有して知覚できる文……………	239
(2) その場になく他の手段が知覚に必要な文……………	254
(3) 各脈絡の役割……………	258
4. おわりに……………	259

第5章 文章構成研究の基礎的視点 III

—ストーリーの変容・その要約、縮約および集約—

1. はじめに……………	269
2. 作品で時の経過の密度を調べる方法……………	272
3. ストーリーの要約……………	280
4. ストーリーの縮約……………	288
5. 「ストーリー」の集約……………	296
6. おわりに……………	300

第6章 文章構成研究の基礎的視点 IV

—文章の基本的構成から次の段階の構成へ—

1. はじめに	303
2. 志賀直哉の「作品」における基本的構成と次の段階の構成	307
(1) 志賀直哉の「作品」における基本的文章構成	307
(2) 志賀直哉の「作品」における次の段階の文章構成	309
3. 向田邦子の「エッセイ」の文章構成	320
4. おわりに	337

第7章 文章構成研究の応用的視点 I

—文型における意味と用法・「～ことになる」を巡って—

1. はじめに	341
2. 作品という場の中で文型を考察する手続き作り	345
3. 「～ことになる」の用法について	350
(1) 「～ことになった」という形で使われている場合	350
(2) 「～ことになる」という形で使われている場合	373
(3) 「～ことになっていた」という形で使われている場合	376
(4) 考察のまとめ	380
4. おわりに	382

第8章 文章構成研究の応用的視点 II

—新聞の「報道記事」の文章構成・モダリティと

レトリックから見た「客観報道」—

1. はじめに	387
---------	-----

2. 言語研究から見た「客観報道」への視点	392
(1) 陳述・モダリティーおよびの文章論・表現論の文分類	392
(2) レトリックの視点	398
3. 『毎日新聞』の報道記事の基本的文章構成	406
(1) 資料	406
(2) 調査の方法と結果	406
(3) 結果と考察	410
3-1 記事の選択	410
3-2 文型の選択から見た報道記事の客観性	411
3-3 レトリックから見た報道記事の客観性	419
4. おわりに	437

結論 文章構成研究の今後に向けて

1. 本研究のまとめ	443
2. 文章構成研究の今後	454
(1) 文章の基本的類型から発展する課題	454
(2) 日本語教育への応用	456
初出一覧	458
テキスト	461
引用および参考文献一覧	462